



故 松澤 壽雄 (RF 元運動部長)

ラジオ関東ナイター中継

— 今だから言えるあの時 —

題字 中川 順

◆横浜にラジオ局誕生

昭和33年2月24日、横浜に京浜地区の民放局としては5番目に開局したラジオ関東は、出力1キロワットのローカル局とはいえて、ユニークな編成とバターくさい内容が聴取者の期待を集め、スタートした。

音楽、スポーツ、ニュースを3本柱として、NHKや既存民放局の型にはまた編成とは異なり、地元の情報を中心に小回りのきく番組が話題を呼んだ。船の汽笛をテーマ音楽のバックに乗せて、ケン田島さんが流暢な英語で語りかける『ボートジョッキー』は、いかにも港ヨコハマの雰囲気を漂わせたラジオ関東の名物番組として、今でも思い出される方も多いと思う。

◆延長戦も最後まで

そして中波ラジオとしては画期的な編成で、既存の民放局を悔しがらせたのが、プロ野球ナイターの連夜にわたる中継、しかも試合開始から終了迄の完全中継である。それまでは日本短波放送が昭和

31年よりナイターを連夜中継していたが、短波という受信上のハンディがあつて、いまひとつ話題性に欠けていた。そこへ出力1キロワットとはいえ中波ラジオが月曜日から日曜日まで、プロ野球ナイターを編成、試合開始から終了まで放送し始めた。さらに「延長戦も最後まで」という文字通りの完全中継であったため、大いに注目を集めたわけである。

それまでのナイター中継は既存民放局が、週2、3回放送していたが、時間枠は殆どが夜7時頃から9時頃までで、試合が長引けばどうしても尻切れトンボになるのは避けられない状況であった。

ところがラジオ関東は試合がどんなに長引こうとも、決着がつくまでは中継をするという心意気。各局は試合がどんなに白熱しても9時ごろになると「試合の途中で残念ですが、この辺で○○球場からお別れします：」というアナウンスを最後に次々と中継を終わってしまう。それから先はラジオ関東の独壇場、現場スタッフは一種の快感を味わいながら中継を続けたものである。



今はなつかしい後楽園球場のスコアボード

たスポンサーのことも少しは考えて欲しいぜ。毎日毎日謝るばかりで営業部員は泣いていられるのだから……」

「うそやかれて、運動部としてはどうしようもない訳で、何とかなだめるのが精一杯。普通中継が延長されて、後続のスポンサー番組を飛ばす場合のコメントは「スポンサーの好意により……」と云うのが常識であったが、ラジオ関東は「スポンサーのご協力により……」とコメントすることにしていた。これは

たつた一局の中継となつて聴取率が鰐のぼりになるのはいいのだが、ナイターの後続番組が次々と飛ばされるわけであるから、営業部は真っ青、いつもその翌日になると、西村営業部長(故人)が渋い顔で運動部へやつて来て、ひとくさり愚痴をこぼしていく。「ナイターもいいけど、飛ばされ

時間枠をとつて提供している番組が否応なしに飛ばされるのだから、好意など持つ筈がない。とにかく、ラジオ関東のナイター完全中継は快調な滑り出しでスタートしたナ

イター中継であったが、3年目にたまで放送すると言う基本方針をガントして譲らず、完全中継の意思を貫いた若宮編成局長の信念は敬服の至りであったが、一方よくそれに耐えてスポンサーとのトラブルもなくナイター中継を看板番組として支えてくれた営業局の方々も大変だったろうと、今頃になつてその苦労がわかるような気がする。

◆初めて途中打ち切りに

昭和36年9月7日、後楽園球場での巨人・国鉄22回戦のことだ。2対2で迎えた延長11回表、国鉄土屋選手が三・本間に挟まれた時、巨人藤尾捕手のタッチを避けようとして巨人長嶋選手と衝突、これが走塁妨害かどうかで大モメとなつた。苛立つたファンがグラウンドに物を投げ込んだり、スタンドで火を燃やすなどして球場全体が騒然となり、遂に機動隊200人が出動して騒ぎを抑える有様、10時ちょっと過ぎに始まつた抗議は延々と続いていた。

現場では始めのうちこそ普通の

して遂に途中で打ち切らざるを得ない事件が発生した。



開局当時のラジオ関東本社社屋

抗議のつもりでとにかく中継を続けていたが、どうも様子が尋常ではない。いかに処理すべきか編成営業両デスクと検討したが、営業は11時20分からの『ポートジョシキ』はスポンサーの了解をとつてないので中止するわけにはいかないと強硬に主張、自宅に居られる若宮編成局長の判断を仰いだ結果「これはもはや野球中継ではない。騒擾事件であるから、途中打ち切りもやむを得ない」ということで、ついに11時20分で中継を打ち切った。途中で打ち切るにあたり、もはや野球とはいえない旨お断りコメントを繰り返したが、納まらないのは熱心な聴取者、たちまち社内の電話は抗議や文句、いやみ脅かしなどでパンク寸前、ベルは鳴りっぱなし、とても対応しきれない状態になつた。

「ラジオ関東は延長戦も最後まで放送するのではないか」ウソつかぬ、テメーなんてえ名前だ。明日社長にはなしをして貴様をくびにしてやる……」

「お前、このあと会社を出てみろ、ただじやすまないぞ、ぶつ殺してやるからナ」

「今から火をつけに行くから待つ

なんとも物騒な内容の電話を受けた運動部や編成部のスタッフはウンザリしながらも、もしやという恐怖から、とても一人では帰れなかつたそうである。

試合は約2時間後の翌日0時8分に再開されたが、2日に跨った史上稀に見る出来事であった。

◆初ナイター中継の内緒話

話は昭和34年に戻るが、初のナイター中継はアナウンサー泣かせの長丁場で苦労した。

当時は、ゴールデンウイークまではほとんどデーゲームであった。しかし西鉄は5月3日（祭日）に大毎とのダブルヘッダーを組み、第一試合は夕方5時にプレーボールというスケジュールであった。

初のナイター中継でもあるし、私と窪田チーフアナウンサーは勇躍博多へ乗りこんだ。

後発局の悲しさ、ネットワークが組めず単独で自社制作せざるを得ない。地元のRKB毎日放送を拵み倒して放送席を確保して頂き、中継機材とミキサー一名を借用、さらにRKB毎日の東京支社までの打ち合わせ線も借りてようやく

◆初ナイター中継の内緒話

話は昭和34年に戻るが、初のナイター中継はアナウンサー泣かせの長丁場で苦労した。

当時は、ゴールデンウイークまではほとんどデーゲームであった。しかし西鉄は5月3日（祭日）に第一試合は夕方5時にプレーボールというスケジュールであった。

初のナイター中継でもあるし、私と窪田チーフアナウンサーは勇躍博多へ乗りこんだ。



平和台球場の筆者（左）と窪田アナ

が何処だかわからない、投球カウントやアウトカウントも間違つているのでスコアがつけられない、一体どうしたんだ?」

勿論窪田君の隣で指示を出してゐる私とて、気がつかないは筈がない。口では言えないで間違うたびにメモを渡して注意したのだが、どうしても直らない、ふと窪田君を見ると顔面蒼白、額には冷や汗と思われる汗が吹き出しているではないか。すると窪田君は股間に指したり、水を飲む仕草をしたりしている。これはのどが渇いているのだと早合点した私は「水かジュース持つて来るからちょっとの間一人で喋つていってくれ」とメモを渡し放送席を離れた。実は私も大分前から小便がしたくてまいったのだが、とにかく水を持つてこなくてはというほうが先で、売店を探しに階段を駆け登つた。すでに売り子は全部引き上げてしまつていない。観客席最上段の売店にやっと辿りついてジュースを買おうとしたが生憎売り切れ、仕方がないので売店のおばさんに頼んでビール用の紙コップに水を入れてもらい、脱兎の如く放送席に戻った。水の一杯入った紙コップ

普を窪田君の前に差し出すと、彼は手を振つて、そうではないといふ仕草、やおらそのコップを持つて元に流してしまつた。そして額の汗を拭いていたハンカチを股間に広げて何やらゴソゴソ、ハン

カチの下に空になつた紙コップをあてがつてたまりたまつた小便を出したらしい。驚いたのはそればかりではない。一杯になつたコップを私に見せるやこれを再び足元に流し、もう一度ハンカチの下に：結局コップ二杯も溜まつていただから、さぞ苦しかつたことだろ。これを知つているのは当の二人のみ、隣のミキサーも傍らのお客様も誰も気がつかず、放送席の前のお客は足元に流れてきたのはビールかジュースだろうぐらいにしか思つていなかつたのではない。

そこで、窪田君は二杯も出しながら、その間絶え間なく喋り続けるという離れ業をやつてのけた。これは誰にでも出来ることではない。アナウンサー根性を存分に發揮した武勇伝として後々語り継がれた伝説の真相である。後日窪田君と私の二人は若宮編成局長から生理現象の苦痛に耐えながら

普を窪田君の前に差し出すと、彼は手を振つて、そうではないといふ仕草、やおらそのコップを持つて元に流してしまつた。そして額の汗を拭いていたハンカチを股間に広げて何やらゴソゴソ、ハンカチの下に空になつた紙コップをあてがつてたまりたまつた小便を出したらしい。驚いたのはそればかりではない。一杯になつたコップを私に見せるやこれを再び足元に流し、もう一度ハンカチの下に：結局コップ二杯も溜まつていただから、さぞ苦しかつたことだろ。これを知つているのは当の二人のみ、隣のミキサーも傍らのお客様も誰も気がつかず、放送席の前のお客は足元に流れてきたのはビールかジュースだろうぐらいにしか思つていなかつたのではない。

ナイター中継を完遂したことは称赞に値するということで表彰され金一封を頂いたが、なんとも珍しい表彰であつた。

◆初の天覧試合、長嶋サヨナラホームラン

昭和34年6月25日、後楽園球場に天皇皇后両陛下をお迎えして、巨人・阪神戦が行われた。

試合は追いつ追われつの大熱戦、同点で迎えた9回裏、先頭打者長嶋選手は阪神村山投手の5球目の速球を左翼スタンドに叩きこみ、

劇的な幕切れという後世に残る名勝負となつた。当時は試合終了後

に入ったルーキー王貞治選手もホームランを放ち、これがONABECKホームランの第1号になつた記念すべき日となつた。そのほかにも悔し涙でマウンドを降りつた阪神村山投手と長嶋選手が宿命のライバルとして、長く対決しきりなり、ドラマの幕開けでもあつた。

またこの日は、その年の巨人軍に入つたルーキー王貞治選手もホームランを放ち、これがONABECKホームランの第1号になつた記念すべき日となつた。そのほかにも悔し涙でマウンドを降りつた阪神村山投手と長嶋選手が宿命のライバルとして、長く対決しきりなり、ドラマの幕開けでもあつた。

◆ナイター中継珍談集

★東映フライヤーズは駒沢球場を本拠地としていたが、夏は蚊が発生して放送席の我々を悩ませた。球団ではその対策として、蚊を退治するために試合中に殺虫剤を散



天覧試合でサヨナラホームランを放った長嶋選手にインタビューする大林アナ

布してくれるのは有り難かったが、アナウンサーは鼻をつく匂いで咳き込んだり咽たりと散々、更にズボンの中にまで入り込んで刺されるので痒くてたまらず、アナウンスも途切れがちになる程。

「ピッチャーフィールドを投げました。」

(ピシヤリ)：打ちました。(ピシヤリ)：」というわけで落ち着いて放送も出来ないという始末、時には現場でCMを読む女子アナを連れて行くのだが、ストッキングの上から刺されて、試合が終わつて見たら蚊に食われた跡だらけという悲劇もあつた。

★駒沢球場の放送席は各局の仕切りが幅の狭い板一枚、従つて隣の局のアナウンサーの声が箇抜け、そこへ3局も4局も並んで中継するので、我々のマイクに他局の声がみんな入つてしまふ。

声の大きさでは中途半端でない
窪田(RF)吉川(TBS)細田(QR)
など、民放大聲五強といわれるそ
うそしたるスポーツアナが勢揃い
しようものならどこの放送だか分
らないほどの大競演となる。お互
い負けてたまるかとばかりにます
ます大声を張り上げるので、さぞ

うるさくて迷惑だったのではなか
ろうか。

★中日球場では観客席の中の特設
放送席で中継していたが、ラジオ
関東の放送なのでどうしても巨人
中心の内容になる。

あるとき、我々のすぐ横にいた
お客様が頭に来て、「お前らここ
をどこだと思っているんだ、名古
屋に来て中日の悪口をいうのはけ
しからん」と手にしていた一升瓶
を叩き割り、解説の飯島滋弥さん
の顎につきつけたのにはまいつた。
すぐさま係員が駆けつけてくれた
ので事なきを得た。私も、これは
関東向けの放送だからといって宥
めたが、大きな声が出せないので
ほとんど効き目はなかつたようだ。

★アナウンサー、解説者も時どし
て珍語を口にすることがある。

「こう淡々としているのは不気
味悪いですね」「ブルペンではリリ
ーフピッチャーも用意まんなん(万
端整つてしているので…)(K解説者)
(O解説者)

◆ラジオ関東のナイターは
永遠に不滅

昭和34年にスタートしたラジオ
関東のナイター中継は、RFラジ
オ日本となつた現在まで39年の歴
史を積み重ねている。



後楽園球場のラジオ関東のゴンドラ放送席

写真提供

RFラジオ日本

この原稿は平成10年5月発行
の関東民放クラブ会報44号に掲載
したものを作成したものです。

筆者の松澤壽男さんは寄稿直後
の平成10年に故人となられました。
(編集委員会)

ターへ…」(Kアナ)つい勘違いし
て「打ちました…ファースト、ベ
ースを捕つてボールにタッチ…ア
ウト」(Sアナ)

今や民放ラジオはナイター中継
真っ盛り、しかし今日の隆盛を築
き上げたラジオ関東の功績は見逃
すわけにはいかない。私も微力な
がらその一翼を担つたのだ
という誇りが生き甲斐にも
なつてゐる。

ON時代の幕開け、ジャ
イアンツ9連覇、王貞治、
世界のホームランキングに
等々。数々の名勝負を足跡
として刻みながら、ラジオ
関東ナイターは連綿として
続いている。

時移り、人は代わり、社
名も変わつたが、誰かさん
の言葉ではないが、《ラジオ
関東のナイターは、永遠に
不滅です…》